

第 8 章 ヒアリングおよびアンケート

8-1 ヒアリングの概要

8-2 アンケートについて

第8章 ヒアリングおよびアンケート

8-1 ヒアリングの概要

マッピングソフトの作成過程で、その周辺仕様やユーザーインターフェースの方向性を探るために、2007年11月から2008年2月にかけて大学工学部の研究者を対象としたヒアリングを行った。大学研究者の方の発言を中心に概要を順に記述する。マッピングソフトとの関係で、特許情報利用に慣れていない研究者は、今回作成した検索結果のグラフ化、スコアリング、特許公報の引用・被引用関係マッピングは、労せずして短時間に重要特許・基本特許にたどり着ける可能性があり研究促進に一定の効果が得られるという意見が多かった。

●特許情報と論文情報の双方をリンクして、統一的に研究情報を検索できるシステムがあれば利用したい。 ※編者注釈 これは、ヒアリングの際に過半の研究者から表明される意見である。学技術振興機構等でサービスが開始されている機能である。

●Fタームを利用した検索は、他の分類検索と比較してテキスト検索との連携がない場合が多く、Fタームと期間を組み合わせる場合を除き、初心者には使いにくい。

●Fタームの分類記号体系は、開発プロセス全体の考え方を見せているものであるから、研究開発で利用する際に良い分類体系と考えている。特許出願書類を書く場合に、はじめに周辺部分の先行技術調査を行い、そこでのFタームがある程度定まってきた時点でFタームリストを参考に書くことがある。即ち、アイデアがどこに位置するのかを確認する意味で、Fタームは使い勝手が良い。

●Fタームに懐疑的な研究者に対してその理由を詳細にお聞きすると、Fタームの分類体系に疑問を持っているのではなく、体系があまりにもしっかりしているので研究者の自由な発想を制約する危険性を指摘していることが判った。要は、Fタームの考え方について理解した上で、分類体系を先に見るのか、あるいは自由な発想を試みた後で見るのかという利用のプロセスについて意見を持っている場合が多い。

●大学でも、特定の会社との関連で既存技術であっても後から追いかける研究を行うことがある。先行で他社に実施されている場合でも、どうしてもそこに参入しなければならない局面の場合は、マッピングをしっかり実施して自己の研究の産業技術上の立ち位置を確認する必要がある。

●企業でも、本当に新しい研究開発に着手する際には、研究情報の調査を論文からスタートするケースが多い。但し、技術を製品に落とし込んでいく局面では特許情報の整理やマッピングが必須である。

●ある技術領域の研究を長年続けていると自然と基本特許はこれだと分かるようになる。そ

の場合に、基本特許の被引用を見ていくとその後どのような技術展開があったのかが分かる。

●引用だけで過去の公報との関連づけをするだけでなく、被引用で将来に向かって公報との関連付けするマッピングシステムもほしい。

●海外の某世界企業は特許のポートフォリオを評価するのに被引用を使っている。すなわち、自分の特許はどのくらい引用されているか、あるいは、自分の特許が引用されて相手の特許出願の権利化をどの程度阻止しているかを確認している。

●研究成果の技術移転先を考えるとときに、ある特許公報の被引用関係を調査して、被引用で拒絶査定となった特許出願の企業を調査して、そこに売り込みをはかったことがある。その意味でも、特許公報の引用・被引用関係のマッピングは必要性が高い。

●化学式の検索は現状の特許検索システムでテキスト検索が掛けにくい。化学式が画像データで表示されることが多く、該当部分はテキスト検索ではヒットしない。

●化学式の場合は、全く異なる用途の場合に見落としがちである。

●IPC で、官能基ごとに分類をしてくれたら便利かもしれない。この意見に対してヒアリング同席者から、日本は別にして、一部、IPC 分類付与の精度が低い国もあるので機能しないのではないかという意見が寄せられた。

●基本特許を出発点に被引用で追っていくと、概ね従来技術を基礎とした複数の特許群に集約することができる。なお、個々の特許群中に、一見、引用関係が希薄に見える特許公報が存在することがある。しかし、この特許公報を精査すると従来技術を踏まえた新規な着想や、技術の応用展開が記述されていることが多い。イノベーション創出の視点で考えると、類似特許群の集約と検討も必要であるが、引用関係が希薄に見える特許公報も応用展開に結びつく研究情報として貴重な存在である。

●特に遺伝子配列になると、多少異なっても類似のものはありえるので、検索漏れが多い。

●長文となる遺伝子配列は、公報本文ではなく別ファイルで提供されている場合が多く、検索システムに乗っていない場合が多いのではないかな。

●遺伝子名で酵素名を検索する際に、名前で検索するとしても日本語名と英語名がある。一般的に酵素名はかなり統一されているが、生物学の場合いわゆる言葉のブレがある。何とかをつくるための酵素という場合もあれば、この前の段階を分解する酵素という名前の付け方もあり調べきれない。ある酵素を調べようとする、それと同じものを示している名前を日本語で2つ、英語で3つと揃えて投入しなければならない。「引っ越し」に「っ」が入るのと入らないのがあるのとがあるのと同様で非常に微妙なブレがある。実際には、ブレがある何十個、何百個という検索語句を一度に投げてそれぞれに対する答えが必要になってくる。

●表記のゆれに関しては類義語辞書を作る方法もあるが、それは二番手以降の研究者には有意義である。類義語辞書はトップ研究者が作成しないと意味がないが、最先端では常時新しい用語が出てくるし、それを反映して異義語辞書を作成するトップ研究者が、実はその情報を欲しいわけであり、その意味で恐らくいちごっこのところがある。

▲ヒアリング担当者の意見として、各社のシステムを利用して特許情報テキスト検索を行う際に、検索フィールドの違いを意識していない研究者が多いと感じている。

8-2 アンケートについて

本マッピングシステムの完成を待って、2008年2月から2008年3月上旬にかけて、大学工学部と工業高等専門学校の研究者を対象として、将来的な改良点をお聞きするために記述方式の簡単なアンケート調査を行った。そこで、今回のマッピングシステムに関して提示された意見を記述する。

●引用文献データの属性、つまり特許査定の引用か拒絶理由の引用かという属性を反映したマッピングシステムを実現して欲しい。

●IPDLの検索でテキスト検索ができない古い情報も、テキスト検索できるようにしてほしい。

●検索による特許公報のグループ化、可視化は有効だと思います。今後、更に短時間で効率よく、取りこぼし(見過ごし)のない検索法を確立してほしい。

●研究活動や技術者教育を実施する際、グルーピングが活用しやすいと思います

●外国特許、それも先進国と発展途上国のマッピング化と類似性の強い特許との比較検討が容易にできるシステムはできないでしょうか。

●出願されている特許が、どこまで実用化されているのかを簡単に知りたい。

●引用関係をグループ化して過去に遡ったグラフで、各群ごとに一定のグルーピングができるシステムを更に改良して利便性向上を図ってほしい。

●特許検索インストラクターの依頼を受けた際に同意語の検索が困難でした。自分の研究分野であれば容易に浮かんでくるものですが、専門分野外の依頼であった場合は依頼をされた先生に教えて頂く必要があり、見落としがあったのではないかと不安になりました。あらかじめ同意語をデータベース化している検索システムがあれば良いと思います。

●マッピングシステムとしては今回作成されたソフトで満足しているので、公的な教育機関には突起検索システムと併せて無償で使えるようにして頂きたい。

●技術開発の方向性の評価ができるとありがたい。

●リアルタイムで、競合企業の開発動向が監視できるシステムであれば便利だと思います。

●公報番号の引用・被引用関係のマッピングに、簡単なテキストマイニングなどを付与し、真に関連の深い特許のみを抽出するようにしてほしい。

●以前、特許検索の際に自分の見たい資料がなかなか探し出せずに苦労した記憶があります。今回、マッピングシステムの開発ということでこの資料を読んだところ、非常に便利なシステムだと感じました。このシステムなら、以前自分が感じた「使い勝手が悪い」ということはなくなると思います。そういった意味では、特に希望する項目はありません。ただ、条件検索など行くと、本当に欲しい情報が実は他にあったなどということは起こるのでしょうか。使う側の理解（知識）も必要なら、ある程度は類義語辞書を作るとわかりやすいのかもしれない。